

猛吹雪の雪洞で大型獣人ク
マに三日三晩犯されて孕み
雌になる小賢しい狐

体 験 版

1

第1話

吹雪の密室と、小賢しい狐の誤算

猛吹雪によって完全に外界から遮断された、雪山の避難小屋。

学園の冬季登山実習中、運悪く同じ吹雪に巻き込まれてはぐれた二人――。

メインの暖房も途絶えた氷点下の密室で、ホッキョクギツネの獣人であるユキは、真っ白でふさふさの尻尾を揺らしながら、暗がりの中で妖しく微笑んでいた。

（……ツイてる。よりによってこんなデカい『暖炉』と二人きりになれるなんてね）

ユキの視線の先には、学園でも一際異彩を放つ巨体の持ち主、ホッキョクグマの獣人・シロ

が、壁際で静かに目を閉じている。身長は2メートルを優に超え、分厚い純白の毛皮の下には、人間離れした規格外の筋肉が詰まっていた。

本来なら恐れるべき絶対的な捕食者だ。しかし、今のユキの思考は、カントボーイー——男の身体に女のおまんこも併せ持つ未分化体質——特有の発情期の熱によって、強気にゆがんでいた。

股間にある未分化のおまんこからは、果実のように甘い匂いの愛液がドロドロと溢れ出し、下着をぐっしょりと濡らしている。

ホッキョクギツネには、大型のクマの狩りの

おこぼれにあずかり、後ろに付き従う習性がある。ユキは持ち前の小賢しさで、この無口でのろまそうなシロクマを『自分の発情を処理するための都合のいい道具』として利用しようと企んだのだ。

「……ねえ、シロくん。寒くない？」

ユキはわざと甘い声を出しながら、シロの巨大な身体にすり寄った。

「俺、すごく熱いんだ。……特別に、俺の身体で温まらせてあげてもいいよ？ その代わり、俺の言うこと、ちゃんと聞いてね？」

シロは無言のまま、氷のように冷たい青い瞳

でユキを見下ろした。

その視線に一瞬背筋が凍るが、発情の熱がユキの優越感を後押しする。ユキは自らズボンと下着を下ろし、真っ赤に充血してとろとろに濡れたピンク色のおまんこを、シロの目の前に無防備に晒してみせた。

「ほら、見てよ。俺、男なのにこんな可愛い穴が付いてるんだ。シロくんみたいな図体だけの童貞には、どうせ使い方も分からないだろうけど……俺が優しく教えてあげるからさっ♡」

クチャッ♡と、ユキは自らの指で肉びらを広げ、皮から顔を出してヒクヒクと震える過敏な

クリトリスを見せつける。

主導権は完全に自分が握っている。そう確信したユキが、さらに言葉を紡ごうとした瞬間だった。

ドサァッ！！

「ひっ！？」

視界が反転した。シロの雪靴のように巨大で分厚い手のひらが、ユキの華奢な胸ぐらをわし掴みにし、そのまま冷たい床へと強引に押し倒したのだ。

抵抗する間すらない、圧倒的すぎる体格と筋力の差。ユキの小賢しい優越感は、その一撃で

ガラスのように粉々に砕け散った。

「……狐が、クマに命令する気か？」

地を這うような低く重い声。無口だったシロの口から紡がれた、絶対強者の圧倒的な威圧に、ユキの全身の毛が恐怖で逆立つ。

「あ、あっ……！ ちょ、ちょっと、痛いっ、シロくん、力強すぎ……っ！」

「自分から餌を差し出してきたんだ。……なら、骨の髄まで食い尽くされても文句は言えねえよな」

ズブリッ！！♡

「キャアアアアアアアアアッ！？！？♡♡♡♡」

ユキの甘い喘ぎを想定していた喉から、鼓膜をつんざくような悲鳴が弾け飛んだ。

シロの人間の指の太さを遥かに超える巨大な指が、愛液で滑りの良くなっていた未開の膣口へと、一切のためらいなく根元まで一気にねじ込まれたのだ。

「おッ……ほォッ！？！？♡♡ あゝあゝあゝあゝあッ！！♡♡」

「すげェな。俺の太エ指が入った瞬間、ナカの肉壁がパニック起こして食い千切るみたいに吸い付いてきやがる。お前、さっきまでの偉そうな態度はどうした？」

「あゝあゝあッ！♡ 痛っ、大きいっ、シロく
んの指っ、太すぎてっ、お腹割れちゃうッ！
♡」

ユキの狭い骨盤の中が、巨大な異物によって
みっちりと埋め尽くされる。

シロの指はただ太いだけではない。ホッキョ
クグマ特有の、氷上を歩くための分厚くザラザ
ラとした『肉球』が、過敏な粘膜のど真ん中—
—Gスポットを容赦なく抉り上げたのだ。

ズチュンッ！♡ズチュンッ！♡ ギシィッ！♡
ギシィッ！♡

「んひiiiiiiiiッ！！♡♡ むりっ、だめっ、

そんな激しくっ♡ 中で分厚い肉球がっ、ゴリゴリ削ってっ、あゝアァッ！♡」

「おらっ！ 俺に都合よく使われるんじゃないのか？ 狐の分際で俺を誘惑した罰だ。お前のそのとろとろの未分化まんこ、俺の肉球の形に完全に作り替えてやる！」

「ひいッ♡ おねがいっ、許してっ、俺が調子に乗ってましたっ！ だからっ、そんな奥までっ……あゝあゝあゝッ！♡♡」

さらに、シロの空いているもう片方の巨大な親指が、外側で充血してパンパンに腫れ上がっているクリトリスを、上からブチュッ♡と重く

押し潰した。

「んあゝアッ！！♡♡ むりいッ！♡ クリちゃんっ、大きい肉球で潰されてっ、息がっ、できないっ、あゝあゝあゝあゝッ！！♡♡」

「泣いて謝ったって遅エよ。お前の甘エ匂い嗅いだ時点で、俺の腹は鳴りっぱなしなんだわ」

内側はGスポットを肉球で削られ、外側はクリトリスを重い質量で押し潰される。

小賢しく立ち回ろうとした狐の浅知恵など、圧倒的な捕食者の暴力的な快感の前では何の役にも立たない。ユキの脳は完全にショートし、ただ質量に翻弄される肉人形へと成り果ててい

た。

「イクっ！？♡ シロくんっ、おれっ、クマの
分厚い指でメチャクチャにされてっ、イっちゃ
うううッ！♡♡」

「出せ。お前の蜜、一滴残らず俺の手のひら
で受け止めてやる」

ギュリギュリギュリッ！！♡♡

「ヒィィィィィィィィィィィィィィィッ！？！？
♡♡♡♡」

プシャアアアアアアッ！！♡♡

ユキは限界を超えた絶叫とともに、弓なりに
背中を反らせ、未分化のおまんこからすさまじ

い勢いで大量の潮を噴水のように噴き出した。

熱い潮がシロの巨大な手と肉球をドロドロに濡らし、氷点下の小屋の中にむせ返るような雌の匂いが立ち込める。

「……ハァッ。すげェ潮だ。完全に俺の力に屈服しやがったな」

絶頂の余韻でガクガクと痙攣し、白目を剥いてよだれを垂らすユキを、シロの氷のような青い瞳が見下ろしていた。

「はひっ……はぁっ……あ、あう……っ♡ シロ、くん……っ、おれ……っ♡」

「俺の指だけでここまでイキ狂うとはな。……」

だが、ホッキョクグマの本当の『質量』は、こんなもんじゃねエぞ」

シロが自身のズボンのベルトに手をかけ、重々しい音を立てて引き下ろした。

圧倒的な捕食者に捕らえられた哀れな白狐の、逃げ場のない雪山での蹂躪が幕を開けようとしていた――。

体験版はここまで

これは、まだ入口です。

この先で、すべてが変わります。
選択も、関係も、そして――結果も。

知らないままで終わるか、
それとも、最後まで見届けるか。

答えは、本編にあります。

猛吹雪の雪洞で大型獣人クマに三日三晩犯されて孕み雌になる小賢しい狐